

濃い・薄い

前田直子

1. はじめに

日本語における「濃い・薄い」という対義的な語の興味深い点は、「濃い」の反対概念としては「薄い」がほぼ対応するが、「薄い」の反対概念としては「濃い」が対応しない場合があることである。「薄い」には、「濃い」に加えて「厚い」という語が反対概念を表す語として存在する。

本稿は、反対概念を表す語との関係を中心に、「濃い」と「薄い」の意義について考察してみたい。

2. 先行研究

森田良行 (1989: 178f) は、「薄い」を「三次元の空間で、こちら側とあちら側とを隔てる部分の隔たりが小さい状態。」と定義し、その小ささの在り方から、①距離的な小ささ、②密度・濃度の小ささ、③関係の小ささ、の三種に分類した。

- ①平板状のものの表側から裏側までの奥行きが小さい状態。反対の状態は「厚い」
- ②あちら側がはっきりと分かるほど（つまり、こちらの特性がそれとはっきり分からぬほど）密度や濃度が小さい。反対の状態は「濃い」。
- ③さらに、あることに対して抱く心理的関係の度合いが小さい。また、ある事柄との間の因果関係が低い。

それぞれの具体的な例と反対概念を示すと、次のようになる。

①隔たり	平板な物体	堅い	板、ガラス、氷、本	厚い
		柔らかい	蒲団、着物、布地 皮革、紙	
	層をなすもの		大気層、雲	
	覆っているもの		皮下脂肪、膜、皮、化粧、塗ったバター	
	幅のある身体部分		胸板、唇	

② 密度・濃度	密生するもの	毛、髪、髭（ひげ）	濃 い
	液体	血液、醤油、水溶液	
	気体	空気、酸素	
	霧状のもの	霧、靄（もや）、煙	
	光	光、影	
	色	緑、紫、色	
	味	甘み、辛み、味わい	
③ 程度	関係	縁、関係	篤 い
	惹かれる心	関心、興味、愛情、親しみ、感銘 友情、人情、情誼、信仰心	
	利得	効果、利潤、儲け	

一方、「濃い」の項目においては、「向こう側がはっきりとは分からないほど密度や濃度が大きい状態。そこから、“ある事物の閉める割合が多いために、そのものの存在が際だつ状態”という意が生まれる。」と定義し、次のような例を示している。

密度		髪、毛、髭
濃度	気体	空気、酸素、霧
	液体	血液、醤油、スープ、コーヒー、水溶液
	味	甘み、辛み
	色	紫、青、緑、墨、敗色

そして、「濃い」は「薄い」の用法のうち、密度・濃度を表す言い方のみと部分的に対応すると述べている。

このような、反対概念を表すことばによって、「濃い」「薄い」、特に多義的な「薄い」の意義を捉えることは大変有意義なことであると言えるであろう。よって、本稿もまずは、「薄い」を基本に、反対概念を表す語との関係から、「濃い」「薄い」の意義を考察していくことにする。

3. 対義関係から見た「濃い」「薄い」

「薄い」の対義語には、「濃い」「厚い」があり、図示すれば次のようになる。

濃い	薄い
厚い	

だが、この3語の関係はそれほど簡単ではなく、具体例を見ると、次表に見るように、A~Hの8種類に分類することができるようである。

濃い	淡い	A 「匂い」「香り」
	淡い・薄+	B 「闇」「夕闇」「暗がり」
	淡い・薄い	C 色
濃い・厚い	薄い	D (1) 具体的な濃度・密度、「味」「煙」 (2) 抽象的な濃度・密度
厚い		E 「雲」「霧」「霾」
		F 具体的物質・物体
ある	薄い	G (1) 関わり (2) 関心 (3) 見込み (4) 利益
厚い	ない	H 「支持」「信用」「保護」

この表を見ると、「濃い」と「薄い」が最も典型的に対義的になるのは、表のD「密度」を表す場合ということになる。そこで以下では「密度」の場合を出発点として、「薄い」から「淡い」への方向、すなわちC→B→Aの方向を次に観察し、最後に「濃い」から「厚い」「強い」「ある」などへの方向を見ていくことにする。

3.1 「濃い」の対義語として「薄い」が対応する場合 (Dの場合)

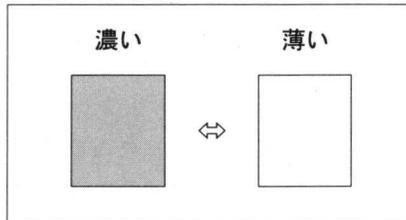
3.1.1 具体的な濃度・密度

「濃い」の対義語として「薄い」が対応する第一は、濃度・密度の場合である。濃度・密度とは、液体（水分）あるいは気体の中に物質（溶質）が混じっている状態の、その物質の割合の多寡を表す。最も典型的なのは液体全体が「濃い・薄い」ととらえられる場合であり、「食塩水、コーヒー、アルコール、お茶、酒、牛乳、血、粘液、体液、粥」などが「濃い」という場合がそれに当たる。それに対して、液体内部に解けている物質（溶質）が「濃い・薄い」ととらえられる場合があり、「塩分、鉄分、アルコール分、塩の味、酸」などが「濃い」という場合である。また、気体の場合も気体全体を捉える「空気、大気、煙、湯気」などが「濃い」という場合もあれば、「酸素が濃い」のように、気体内部に存在する

物質に言及するものもある。

さらに「濃い」と「薄い」が対応する場合としては、身体の部位に見られる毛髪、即ち「髪、毛、ひげ、眉」の場合と、「そばかす・あざ」の場合がある。「濃い髪」とは、髪が密集して生えている状態であり、「薄い髪」はその逆である。「そばかす・あざ」はその色をとらえていると見ることもできるが、「薄いそばかす・薄いあざ」はやや言いにくく、「薄い」を用いるのが一般的であろう。

このことから見ると「濃い・薄い」とは、次の図のように、ある一定範囲の空間の中にある物質が占める割合の多寡をとらえたものであるとすることができる。



3.1.2 抽象的な濃度・密度

「濃い・薄い」がこのような図に示されるような状況を表すものであるとすると、「濃い・薄い」が次に見るような抽象的な関係を表すものに使われることも十分理解できる。

- (1) その一方で外相は「(安保理では) 当然のことながら憲法の枠内で責任を果たしていく」と述べたが、これは軍事的色彩の濃い国連活動への参加が常任理事国入りの「条件」にはならず、これまで日本が行ってきた枠組み内の活動でも資格が得られるとの見解に基づくものだ。

(朝日新聞 1993. 7. 1)

- (2) 一方、国際緊急援助隊が掃海艇の活動に比べて武力行使色が薄いのは当然である。しかし、だから自衛隊を、というのは論理の上で矛盾がありはしないか。

(朝日新聞社説) 1991. 5. 17)

- (3) 会社員は昨年5月に、後円部の墳丘の中段に開いていた穴から入ったという。前日、小学生の息子から「穴があって入ったら中がトンネルになっていた」と教えられたのがきっかけだった。欽明天皇陵の可能性が濃いというが、写真の存在が明らかになって以後、宮内庁が立ち入り禁止にした。

(天声人語 1992. 3. 28)

- (4) また、ニューヨーク連銀が一ドル＝一〇円を切る段階で介入に乗り出したことは、「円高が始まる前の一ドル＝一二〇円台に戻る可能性は薄

いが、当面は一一〇円・一一五円台程度の水準で為替市場が落ち着くことを米側も求めている証拠」(長信銀為替関係者)としている。

(朝日新聞 1993. 4. 28)

- (5) この問題に対する国民の合意を踏まえた中身の濃い論議が必要だ。

(朝日新聞社説 1985. 2. 19)

- (6) 十六日の東京株式市場は、夕方に発表される政府の景気対策が中身の薄いものになるという見方が強く、機関投資家などが売りの動きを強めている。

(朝日新聞 1993. 9. 16)

- (7) こうした国に対し、たとえ PLO 攻撃のためとはいえ、いきなり空爆するのは、国家主権の侵害であり、イスラエルによる「国家テロ」ともいうべき性格が濃い。

(朝日新聞社説 1985. 10. 3)

- (8) 郵政省は、公衆電話は「電話のない人のための共同電話」という当初の性格が薄れたとみて、公衆電話だけに絞って今後の在り方をさぐる調査研究会を設けている。料金問題も含めて検討中で、三月中旬にも中間報告を出す予定だ。

(朝日新聞 1993. 3. 6)

- (9) 太平洋圏の経済協力を進めるうえで最大の障害となるのは、関係国の間の経済、政治から文化に至る大きな格差だろう。加盟国が同質性の高い OECD や EC のように、共通の経済政策をとることはきわめてむずかしい。かといって、政策の協調がなければ経済協力体制の性格が薄れ、先進国による発展途上国への援助機関になってしまう。

(朝日新聞 社説 1988. 5. 21)

このような抽象的なものには、ある抽象的な概念や事態が持っている傾向を「色」ということばを使って表した「～(の)色、～的な色彩、色合い」のほか、ある抽象的な概念や事態が持っている意味あるいは重要性としての「内容、中身」があり、これは先の図1に示された関係と一致する。ある空間に占めるある要素の多寡を問題にしているのとらえることができるだろう。

その他にも「～的な要素、気配、様相、性格、性質、ニュアンス、傾向、趣き、側面」「疑い、不安」「気分、情緒、～との空気」といった名詞が「濃い」あるいは「薄い」と結びつく。さらには「関係、関連、つながり、つきあい」もあるが、これらは「濃い・薄い」だけでなく「濃い・ない」の対義関係をもつこともある(cf. 3. 4)。ただし、例(8)(9)に見るように、「薄い」ではなく動詞「薄れる」と結びつく場合もあり、また、「濃厚」「希薄」という言葉も用いられる。

抽象的関係を表す場合は、名詞を修飾する装定の用法よりも、述語として使わ

れる述定用法の方が多く、抽象化して、文末名詞として機能するようになった名詞を伴い、モグリティを担う用法へと、文法化・形式化していくものと思われる。例えば「可能性が濃い」は「かもしれない」に近づき、「かもしれない」の分析的な形式として機能している。

なお、ペアになる言葉において常に見られる現象であるが、一方しか使えない慣用的な用法がある。例えば「影が薄い（目立たない）」や「濃い顔（西洋風の顔）」「キャラが濃い（性格が独特）」といった表現は固定化されている。

3.2 「濃い」の反対概念として「淡い」が対応する場合

3.2.1 「薄い」「淡い」の両方が対応する場合（Cの場合）

「濃い」の対義語として「薄い」と「淡い」の両方が対応する場合がある。第一は色の場合である。

(10) a 濃い赤、薄い赤、淡い赤

ただし、「淡い」に関しては「ピンク、水色、グレー」といった中間色の方によりふさわしいようである。また、色のうち「白」に関しては、「*濃い白」「*薄い白」「*淡い白」はない。また「黒」に関しては、「白」よりは許容されることもあるかもしれないが、やはり他の色に比べると成立しにくい。色の場合、色素の粒の密度の大きいものが「濃い色」であり、小さいものが「薄い色」になる。「白」に「濃い・薄い」がないのは、「白」については、色素の粒の多寡をとらえることができず、色が無い状態が「白」だからであろう。

また「化粧」「口紅」「塗り」や「影」などが「濃い↔薄い・淡い」と対応するが、これらもすべて「色」に関わるものである。

(11) 飯尾さんが病棟の看護婦さんたちに「もしあなたが入院したら…」と尋ねると「薄い化粧ぐらいはしたい」という答えが返ってきた。

(天声人語 1988. 1. 6)

3.2.2 「淡い」および「薄～」が対応する場合（Bの場合）

「濃い」の対義語として「淡い」と、それから「薄」を用いた複合語が対応する場合を次に見よう。

「闇・暗闇・暗がり」のような名詞は「濃い」と結びつく。

(12) それは線香花火のごくあっけなくパチパチと燃えて、あとにより一層濃い暗闇を迎えた。 (北杜夫「夜と霧の隅で」)

(13) 二人は寒さのしのびごみはじめた窓に近寄り、そとに目をやった。いっつもなら夕ぐれとともに輝きを増す少しはなれた家々も、いまは冷たく雪に彩られて、濃い夕闇のなかで死んだように横たわっていた。遠くの繁華街のあたりの空にも、明るさはなにもなく、うそのようなさ

びしさが占めていた。 (星新一「ボッコちゃん」)

(14) スイッチをひねる音と共に、部屋の電灯が明るくついた。いままで占めていた濃い闇は、一瞬のうちに消え去り、酒にぬれた服の両親が照らし出された。 (星新一「ボッコちゃん」)

(15) 姿勢の崩れる前に杏子は彼の軀をかわして、奥の間の、一段と濃い暗がりの中へのがれて行く。 (古井由吉「杏子」)

その反対概念を表すには「淡い」が使われることがある。

(16) 彼は興奮をおさえきれなかった。コールドールをよけて路にでると、百本の糸で操られたマリオンネットになってとびはね、つづいて四つ足になって「ぶおおーん、ぶるるーっ」と吼えた。何年も前に祖国の引力圏から脱出した当時の躍動と自由の感覚がそっくり復活していた。彼は健康な歯をむいて白んでくる淡い闇を噛んだ。地上十センチでは噛むものがみつからなかった。これからは鮫のように口をあけて地べたを這うぞ。そして二度と浮きあがらないために、妻と生まれてくる子らをすべて背負って歩くんだ…。 (青野聡「愚者の夜」)

(17) それに気がいたら、いつの間にかぼくたちのまわりを淡い夕闇がすっぽりと包みこんでいたのだ。 (庄司薫「赤頭巾ちゃん気をつけて」)
「薄い」を用いて、「薄い闇」「薄い夕闇」「薄い暗がり」という言い方は落ち着かない。ただし、「薄闇」「薄暗がり」という複合名詞は可能である。

なお、次例はやや特殊な例かも知れないが、抽象的な名詞句「羨望の念」に対して、「濃い」「淡い」が併記されているが、やや文学的な表現であり、「薄い」「ない」および「強い」が一般的であろう。

(18) そして彼は二階の廊下を歩きながら、自分の遅生れの子と魚崎の早生れの長男とが学齢が同じで、小学校の入学のときはともかく、中学以後の入学試験のたびごとに、淡い (それとも濃い?) 羨望の念をいだいていたことをすばやく思い浮べ、自分の卑しさを叱っていた。 (丸谷オ一「年の残り」)

3.2.3 「淡い」のみが対応する場合 (A の場合)

現代語においては「薄い」は視覚的な感覚と結びついているようである。そのため、「香り」に対しては「薄い」を用いることができず、「淡い」が使われる。

(19) ハッカ飴の淡い香り。 (安部公房「飛ぶ男」)

(20) 「枇杷じゃなきゃ意味がないわ。枇杷の柔らかくてもろい皮とか、金色の産毛とか、淡い香りとかを求めているの。しかも求めているのはわたし自身じゃないのよ。わたしの中の「妊娠」が求めているの。ニ・

ン・シ・ンなのよ。だからどうにもできないの」姉はわたしの声を無視して、わがままを言い続けた。(小川洋子「妊娠カレンダー」)

- (21) 噴火から2カ月以上もたつのに、雨を吸った溶岩のすきまからほの温かい湯気がわいている。ふと淡い香りがあって、まさかと思って落ち椿を拾ってみたら、つつましやかな香りがあった。やぶ椿は香りが無い、と思ひこんでいたのは浅はかだった。(天声人語 1987. 2. 4)

「香り」が「濃い」というとき、その「濃い」は「強い」に置き換えることも可能であろう。

- (22) 新橋駅をでて御門通りを歩いていると、強くにおうものがあった。ビルの一角に数十本の沈丁花(じんちょうげ)が咲いて、湿った空気の中に濃い香りをただよわせている。都会で生活をしていると、ある種の神経は鋭くとぎすまされるのに、鈍感になってしまう部分もある。(天声人語 1985. 3. 15)

「濃い」は「匂い」にも用いられた例がある。

- (23) ザッザッという音、テレピン油の濃い匂い。(後藤紀一「少年の橋」)
しかし「淡い匂い」は「淡い香り」に比べて、やや用にくいようである。「淡い」が持つ肯定的なニュアンスと、「香り」が持つ、好ましい「匂い」であるという意味合いとがうまく合うからであろう。

「匂い・香り」に対しては「強い」そして「弱い」を使うことも可能であろうが、「弱い香り」は「淡い香り」に比べると、必要な香りの成分が少ないという否定的なニュアンスがあり、「淡い香り」が持つ、香りの成分が少ないことを肯定的に捉えるのとは対照的である。

3.3 「薄い」の反対概念として「厚い」が対応する場合

3.3.1 「厚い」と「濃い」の両方が対応する場合 (Eの場合)

「薄い」の反対概念には「濃い」の他に「厚い」がある。「厚い」に対応する「薄い」は、「平板状のものの表側から裏側までの奥行きが小さい状態」であり、「薄い・濃い」の場合の「薄い」とはだいぶ異なるように感じられるが、両者が用いられる場合もある。

それは、「霧」「霽(もや)」「霞」のような語に対する場合であり、どれも、大気中に微少な浮遊水滴が存在する状況を指す気象用語で、出現位置や視界などによって区別した語である。ある空間に存在する浮遊水滴の「密度」として捉えれば「濃い」が用いられ、浮遊水滴が存在する空間の奥行きと捉えれば「厚い」が用いられると考えてもよいのかもしれない。だが、「薄い」の方は、どちらなのだろうか。

(24) いまと長沙の朝との間に濃い霧がかかってしまった。

(辻原登「村の名前」)

(25) 葉を落しつくした樹々が余計病棟のつらなりを寒々しく見せ、梢の辺りがぼやけているのは薄い霧がたちこめているためにちがいがなかった。

(北杜夫「夜と霧の隅で」)

(26) 厚い霧に包まれてもしたように輪郭がぼやけている。

(野呂邦暢「草の剣」)

例えば「霧」の場合、「厚い霧」とは、向こう側が透けて見える「薄い霧」と、見えない「厚い霧」という奥行きをとらえることもできるし、浮遊水素の量が少ない「薄い霧」と、多い「濃い霧」ととらえることもできる。「薄い霧」は、密度が「薄い」のか、奥行きが「薄い」のか、区別はつかない。どちらでも構わないのである。

同じ密度であっても、量が増えれば密度が濃くなると感じられることがある。例えば、バケツに絵の具を溶かして色を付けた水を、コップで少しすくって見ると、色が薄くなって見えるだろう。全体量が増えることによって、すなわち「厚い」状態になることで、「濃い (=密度が高い)」と感じられるのではないだろうか。このような認知が「濃い」と「厚い」を結んでいる可能性があることを、「霧・靄・霞」といった語との結びつきが示しているように思われる。

3.3.2 「厚い」のみが対応する場合 (F の場合)

「薄い」に対して「厚い」が用いられるのは、次のような平板状の物体である。全て個体であり、気体・液体には当てはまらない。

(27) 扉、壁、ガラス、めがね、皿、蓋、葉、せんべい、チャーシュー、食パン、幕、カーテン、毛布、布団、紙、膜、セーター、ブラウス
さらに、「薄い」ものが集まって層をなす場合に「厚い」が用いられる。

(28) 本、書類、紙、手紙、新聞紙、層、断層、氷、雲、雪、ホコリ、塗ったバター、クリーム

「雲・雪・ホコリ」は薄い物の集合というより粒子が集まったものであるが、共通するのは平面状態にほぼ均等に集合するという点である。粒子が集まった最初の状態が「薄い」と認識され、その量の増え方が層状であり、増えた結果が「厚い」と認識される。「塗ったバター、クリーム」なども同様である。

また、身体部分にたいして「厚い・薄い」が用いられることがある。「羽、胸板」のように、身体の中では平板状と捉えられるもの場合はもちろんのこと、「皮膚、肉、肉付き、皮、繭、羽毛」のように身体を覆うものについても用いられる。これは覆うという状態が平板状のもので包む様子を表すからであろう。ま

た「唇」に対しても「厚い・薄い」が用いられる。これは、正面から見た唇のタテの長さを表現するが、「太い・細い」や「長い・短い」ではなく、「厚い・薄い」が用いられるのは、唇も「肉」の一部であるという認識からかもしれない。ちなみに、同様に正面から捉えたタテの長さであっても、眉の場合は「太い・細い」が用いられる。

なお、次の例は「ひげ」に対して「厚い」が用いられている。

(29) 厚いひげが生物のように動き、ひげに隠れた表情の激動が分る。

(安部公房「イソップの裁判」)

通常「ひげ」には「濃い」が使われるのであるが、この例では「ひげ」の密度よりも「ひげ」が層をなし、束をなして、一つの物体のようにになっている点に注目して表現しているものであろう。

3.4 「厚い」「薄い」が抽象的な概念を表す場合

抽象的概念を表す名詞について、その程度を表すのに「厚い・薄い」が用いられることがあることは3.1.2でも見たが、抽象概念によっては、「厚い」の反対概念は「薄い」ではなく「ない・少ない・弱い」などが用いられ、「薄い」に対しては「ある・多い・強い」が用いられる場合がある。このような場合について、次に見てみよう。

ある	薄い	G	(1) 関わり	(2) 関心	(3) 見込み	(4) 利益
厚い	ない	H	「支持」「信用」「保護」			

3.4.1 「薄い」と「ある」が対応する場合 (G の場合)

次のような抽象名詞は「薄い」に対して、「ある」が対応する。(cf. 森田1989)

(1) 関わり…縁、関係、など

(30) 向田邦子「お雑煮に入れるものは？」澤地久枝「とり肉と三つ葉とかまぼこだったかな。結局、東京風にしたんだと思うけれど、海の幸には縁が薄かったわね。」(向田邦子『向田邦子対談集』)

(31) これまでの3極構造は、日米、米欧が密接で、日欧の関係が薄かった。拡大する欧州と日本が緊密化すれば、この不等辺三角形が是正されることにもなる。(朝日新聞社説 1990.3.8)

(2) あるものに対して惹かれたり抱いたりする心

(32) 関心、興味、意欲、熱意、意思、～する気、愛情、親しみ、友情、情誼、信仰心、魅力、人気、なじみ、認識、自覚、記憶、熱意、印象、表情、感銘、感じ、存在感、期待感、満足感、危機感、実感、など

(33) 経済力が日ソ外交で大きな政治的意味を帯びるのはいうまでもない。日本の資本や技術へのソ連側の期待の高さに反比例して、日本では「ソ連は商売の相手として魅力が薄い」「経済苦境を救ってやる義理はない」といった空気がまだ強いようだ。(朝日新聞社説 1988.12.16)

(34) 「のらくろ」の生みの親だ。といっても若い人にはなじみが薄い。
(天声人語 1989.12.13)

(35) 弁論部にいたそうだ。雄弁の技術はたいしたものである。だが、残念なことに、ありのままに意中を吐露している感じが薄い。
(天声人語 1990.2.20)

(36) 高校を中退した若者が、年間で12万人を超えた(89年度)。生徒総数の2%強というと実感は薄いが、1校あたり22人余と聞けば、あらためて驚かされる。
(朝日新聞社説 1991.2.15)

(3) あるものや事態が持つ(おもに潜在的な)性質

(37) 見込み、実現性、必要性、競合性、将来性
犯罪意識、意味、威力、効力、効果、説得力、根拠、痕跡
伝統、理由、勝ち目、幸せ、表情、など

(38) 若い人に好かれなければ将来性が薄いとすれば、納豆も変わらざるをえないだろう。
(天声人語 1988.2.15)

(39) 国民としても、首相に一番問いただきたいのはそこである。生活者優先、暮らしをよくするというお題目は聞きあきている。にもかかわらず、あえて内政の柱にすえるのであれば、実現の方策を具体的、体系的に示さなければ説得力は薄い。
(朝日新聞社説 1991.11.14)

(40) 頷いた父親に向けられた貴晶の顔は、青黒い影に沈んで、貧寒として表情の薄い貌の奥に幼児の頃の輪郭が浮かび出ている。
(奥泉光「石の来歴」)

(4) 利得

(41) もうけ、利、利ざや、経済観念、など

(42) また石油危機で「騒動」のタネとなった灯油も、行政指導で間接的ながら価格抑制をしているので、やはり利は薄い。結局、ガソリンのもうけで石油業界は息をついている。
(朝日新聞社説 1985.7.13)

(43) 支那人達は蒙古人の無智を侮り、蒙古人の経済観念の薄いのにつけてんで、家畜をさえ、とりあげてしまうやからもあった。

(石塚喜久三「纏足の頃」)

これらの名詞は、例えば「なじみがある \longleftrightarrow ない」のように、本来「ある \longleftrightarrow な

(朝日新聞社説 1991.12.8)

「支持」「信用」「保護」のような動作性の漢語名詞の場合も「ある・ない」の対義関係が基本であり、それに対して、単に「ある」のではない様子を表すために「厚い」が用いられている。

例えば「指示がある・指示する」のような使い方では、単にその動きの存在を示すだけであるのに対して「指示が厚い」は、その程度や量・頻度・回数多さを表すために比喩的に用いられている。「厚い」を用いることによって、一人の動作主から一つの対象に対して向けられる一回の動きではなく、動作主や動きそのものが多数的・多回的事であることが示される。その意味で、「層」の量的多さを表す「厚い」がぴったりするであろう。

これら「厚い」の反対概念は、(48)のような例はあるものの「薄い」ではやや表しにくいようである。「濃い↔薄い」は密度というやや具体性を欠く尺度に基づくため、抽象名詞となじみやすいのに対し、「厚い↔薄い」は物体の奥行きの大きさという具体的な量を指すため、抽象的概念の程度を表すこととしては用いにくいのかも知れない。

4. おわりに

以上、「濃い・薄い」を中心に、「厚い」「淡い」などのかかわりを、共起する名詞から見てきた。「濃い・薄い」はある一定範囲の空間に占める粒子状の物質の多寡を捕らえたものであり、色や香りに対しては「薄い」から「淡い」が用いられていく。また、物質が層状になると「薄い」に対して「厚い」が用いられる。また「濃い・薄い・厚い」は具体的な名詞だけでなく、抽象的な名詞に対してもその多寡を表すのに使われ、「濃い・薄い」は「～的色彩が濃い・薄い」という表現を媒介に、目に見えない雰囲気の程度を表すのに用いられる。また「厚い」と「薄い」はそれぞれ「非常にある様子」「少しある様子」を比喩的に表すのに使われる。これは複数の人、人の集団による反応としての行動や感情・思考などを表すのに、同一の物質が重なった様子を表すという「厚い・薄い」のイメージとぴったり重なるからであろう。

参考文献

森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店